

結合による世界の構築

——安倍首相の追悼式参列記事の分析——

石 上 文 正

〈キーワード〉

①結合 ②節合 ③スチュアート・ホール ④世界構築 ⑤ラクラウとムフ

〈論文要旨〉

2015年6月23日、安倍晋三首相は、「戦後70年沖縄全戦没者追悼式」に参列した。この行事を扱った英国の *The Guardian* の記事を、「節合」ではなく「結合」という概念を用いて分析した。その結果、この記事の主たるテーマは、安倍首相・政権への批判であり、その理由・原因の第一は、平和憲法の解釈の変更を伴う安保法案制定の動きであり、第2は、基地の過重負担とそれと深く関わっている基地移設問題であることが判明した。安倍首相への批判に併せて、安倍首相のイメージを悪化させるためのさまざまな手段（たとえば、安倍首相への戦争イメージの付与）が用いられている。同記事の最後に「性奴隷もしくは慰安婦」に関するトピックが結合されていて、「節合」概念を考えるために、この結合が「必然的」なものか「非必然的」なものかについても議論した。

“Worldmaking” through connection:

An analysis of an article on Prime Minister Abe's attendance at the memorial service to mark the 70th anniversary of the end of the Battle of Okinawa

Fumimasa ISHIGAMI

〈Key Words〉

① connection ② articulation ③ Stuart Hall ④ worldmaking ⑤ Laclau and Mouffe

〈Abstract〉

Using the concept of “connection” which deals with either “necessary” or “non necessary” linkage between two or more different events described in words, phrases, clauses and sentences, I analyze an article from *The Guardian* which describes Abe's attendance at “the memorial service marking the 70th anniversary of the end of the battle of Okinawa.” The analysis reveals that the main theme of the article is criticism of Prime Minister Abe for trying to pass security related bills with an attempt to reinterpret the pacifist constitution and for the heavy military burden that Okinawa has been bearing and its relation to the current controversy over relocating an airbase in a densely populated city to the coast. The author uses various means to attach evil images to Abe, such as war related words put around Abe. The topic about “sex slaves or comfort women” is connected to the end of the article on the memorial service in Okinawa. If we take a viewpoint that the service has nothing to do with “sex slaves or comfort women,” the linkage can be thought as “non necessary” linkage. But if we think that both Okinawans and “sex slaves or comfort women” are victims of World War II, the linkage can be thought as a “necessary” connection.

結合による世界の構築

——安倍首相の追悼式参列記事の分析——¹⁾

石 上 文 正

0. はじめに

少々異例だが、本稿執筆の舞台裏から語っておこう。2015年6月23日は、沖縄戦の犠牲者を悼む「慰霊の日」であった。安倍晋三首相は、この日「戦後70年沖縄全戦没者追悼式」に参列した。このことを各メディアは伝えたが、そのなかで英国の *The Guardian* 紙の記事を読んだところ、ある“違和感”を感じた。この“違和感”については後述することになるが、このとき考えたのは、この“違和感”を的確に説明できる手法は何かということであった。そのとき思いいたったのが「節合」であった。

「節合 (articulation)」は、カルチュラル・スタディーズの研究者がよく用いる手法・理論である。ところが、この「節合」について検討したところ、後述の疑問がでてきてしまった。そこで「節合」の代わりに、これに似た概念である「結合 (connection)」という一般的用語・概念によって分析を試みることにした。

また、筆者は文章、テキスト、ディスコースといわれているものは、一種の「世界構築」であると考えている。いままで石上 (1995) では、この「世界構築」に関して、グッドマン (1987) の理論を応用し、世界構築に用いられている機能的要素を中心に考察した。さらに、石上 (2013) ではリップマン (1987) の「疑似環境論」に触発され、いかに言語によって疑似環境が構築されているかについて考察した。今回は、世界構築と「結合」の関係について考察を試みる。

1. 分析対象およびアプローチ

本稿で分析するのは、安倍晋三首相が、2015年6月23日に「戦後70年沖縄全戦没者追悼式」に参列したことを扱った *The Guardian* のオンライン上の Justin McCurry 著 “Japan’s PM Shinzo Abe heckled at Okinawa battle anniversary event” (Tuesday 23 June 2015 11.57 BST, Last modified on Friday 26 June 2015 10.33 BST) である。

すでに述べたように、本稿では「節合」の代わりに「結合」をキー概念として分析を行うが、まずホール (1998: 33) の「節合」の定義からみておこう。

節合とは、特定の条件化で、二つの異なる要素を統合することができる、連結の形態なのです。しかし、そのつながりは、いかなる時も常に、非必然的で、非決定で、非絶対的かつ非本質的なものです。(An articulation is thus the form of the connection that can make a unity of two

1) 2015年8月8日、愛知大学(名古屋校舎)で開催された第10回メディア意識研究分科会において発

表したレジュメを大幅に加筆・修正したものである。

different elements, under certain conditions. It is a linkage which is not necessary, determined, absolute and essential for all time.)

ホールの「非必然的で、非決定で、非絶対的かつ非本質的なものです。」という言い方から、ホールの基本的な考え方が非本質主義的もしくは構築主義的なものであることが推察される。Morley and Chen (1996) が編集した、ホールの論文やインタビューが多数採録されている *Stuart Hall: Critical dialogues in cultural studies* に Slack の “The theory and method of articulation in cultural studies” が収載されている。そのなかで、Slack (1996: 112) が、“Theoretically, articulation can be understood as a way of characterizing a social formation without falling into the twin traps of reductionism and essentialism.” と述べていることからこのことがわかるであろう。

しかし、「はじめに」で述べたように、この「節合」概念に疑問が生じた。その疑問とは、ホールが、節合を「非必然的で、非決定で、非絶対的かつ非本質的なもの」と言っているくだりである。「非必然的」とか「非本質的」ということばを使用したとき、まさにそのとき「必然的」で「本質的」な連結の存在を措定してはいないだろうか。そうであるなら、これは本質主義であろう。さらに、ある連結を指して、A は必然的な連結で、B は非必然的な連結と簡単にはいえないと考えられる。この点については、「考察」で具体的な例を挙げて再度検討する。

このような理由で、本稿では「節合」という術語ではなく、「結合」という一般的用語を用いて分析する。つまり、「非必然性」と「必然性」などの区別をもうけず、二つ以上の要素（次に説明するように、「要素」の代わりに「契機」という術語を用いることになる）が結びつけられている言語現象を「結合 (connection)」とする。

また、ホール (1998:34) 自身が「わたしが使用する意味での節合の理論は、エルネスト・ラクラウの『マルクス主義理論における政治とイデオロギー (*Politics and Ideology in Marxist Theory*)』において、つくり上げられました。」と述べているように、ホールの節合理論は、ラクラウの影響を大きく受けている。

ラクラウとムフ (2012: 240) は、「節合」について、次のように述べている。

…私たちが節合 (articulation) と呼びたいのは、節合的实践の結果としてアイデンティティが変更されるような諸要素のあいだの関係を打ち立てる実践である。節合的实践の結果として生じる構造的全体性を、私たちは言説 (discourse) と呼びたい。

ラクラウとムフも非本質主義的な立場をとっているので、上記の「変更 (modified)」ということばに少し違和感を覚える。節合実践の前に、あるアイデンティティが固定されているという前提があつてはじめて“変更”がなされると考えられるからである。理論的には、非本質主義的な立場では、“アイデンティティ”は固定されていないはずであろう。ともあれ、Laclau and Mouffe (2001:91) は、「要素 (element)」と「契機 (moment)」を区別して用いている。前者は、節合されていない差異で、後者はディスコース内において、節合されているときにのみ認められる差異ある特異 (differential) な位置 (positions) のことである。つまり、節合が成立するときに「要素」が「契機」として成立し、

それにしたがって、ある特定の「アイデンティティ」が“変更”・生成・構築されると考えられる。本稿での「結合」においても、この定義を念頭において分析をすすめてみる。つまり、筆者が関心を抱いたのは、節合（結合）によってアイデンティティが変更（生成・構築）されるという考え方である。

2. 分析

分析対象記事は、二つのヘッドラインと 27 段落で構成されている記事である。本稿では、段落ごとに分析をすすめるつもりである。そのさい、すべての段落（記事）を直接引用することはない。ただし、引用しない場合は、簡単な日本語の要約を付すことにする。引用するかしないかの主要な判断基準は、〈安倍首相〉もしくは〈安倍政権〉が契機として入っているということである。なぜこれらを重要視したかといえ、全記事中の登場（人物）頻度がもっとも多かったからであることと、後述するように、同記事は安倍批判が主要なテーマであると考えられるからである。

本稿の分析でいくつか問題があろうが、そのなかの基本的な問題は、結合されたもののなにを「契機」として同定するかということである。この問題は神話素、物語素といった「要素（契機）」と関わる問題であるが、現在のところ整理ができていない。今回は、結合されたもののなかで、主観的にまとまりがあると考えたものを「契機」とした。なお、本稿では〈 〉によって結合された契機やそのアイデンティティを表示する。

すでに指摘したように、主たるテーマが、安倍批判であると考えられるので、〈安倍首相〉という契機に何が結合されたかを中心に議論をすすめることになる。

本稿の分析対象記事には、人によっては首肯できない内容があるかもしれないが、本稿の目的は、“歴史的事実”がいかなるものであり、それが“正しく”記述されているかを明らかにするのではなく、安倍首相の戦後 70 年沖縄全戦没者追悼式への出席が、いかに構築されているかを「結合」という視点を通して明らかにすることにある。そのため、本稿では、記事の記述が“正しい”とか“正しくない”とかについては言及しない。

第 1 ヘッドライン

Japan's PM Shinzo Abe heckled at Okinawa battle anniversary event

この第 1 ヘッドラインでは、〈安倍首相〉が〈やじられたこと〉、〈沖縄戦の記念行事〉と結合されている。この結合によって、〈安倍首相〉は、批判の対象者として、アイデンティファイされる。

第 2 ヘッドライン

Abe heckled over continuing presence of US forces amid criticism of his attempts to allow Japanese troops to fight overseas for first time since war

この第 2 ヘッドラインでは、〈安倍首相〉が〈やじられたこと〉が、〈米軍の継続的な駐留〉と結合されている。〈安倍首相〉が〈やじられたこと〉は、“over”という結節点（契機と契機を結合する機能を果たしているが、それ自体は契機にはならないことば）から考えるに、〈米軍の継続的な駐留〉が理由・原因（もしくはそれに近いもの）として結合されているようだ。そして、さらに「日本の軍

隊が海外で戦うことができるようにする」という〈安全保障関連法案（以後「安保法案」とする）制定への動きに対する批判〉が結合されている。この結節点は“amid”であるから、状況・コンテキストとして結合されていると考えることができる。

二つのヘッドラインにおける、複数の結合によって、安倍首相がやじられたことが、多面的に結合された世界として構築されていることになる。

また、“US forces”、“Japanese troops”、“fight”などの〈戦争〉が語彙レベルで〈安倍首相〉と結合されている。これらの具体的な表象ではなく、第6段で用いられている“security”のような抽象レベルの高い表象を用いることもできたであろう。こういった意味で、このヘッドラインは、〈戦争〉の“におい”が強い世界としても構築されている。このことによって、〈安倍首相〉には、〈戦争〉のイメージがまわりつくことになる。

第1段

Japan's prime minister, Shinzo Abe, has been heckled at an event marking the anniversary of the end of the bloodiest battle of the Pacific during the second world war, as criticism mounts over his attempts to allow Japanese troops to fight overseas for the first time in seven decades.

第1段であるリードでは、ヘッドラインで述べられた情報が詳細化されている。主節では、安倍首相がやじられたことが示され、従属節では安倍首相の安保法案制定への取り組みとそれへの批判が高まっていることが示されている。つまり、〈安倍首相〉が〈やじられたこと〉、〈安保法案制定への動きに対する批判〉が結合され、〈安倍首相〉が〈やじられたこと〉の原因・理由として、〈安保法案制定への動きに対する批判〉が結合されている。なお、二つの節には、“battle”、“war”と“troops to fight”という〈戦争〉の共通性がみられ、〈安倍首相〉に結合され、引き続き〈戦争〉の“におい”が強い世界として構築されている。

この第1段では、第2ヘッドラインで示された〈米軍の駐留〉が消えている。同ヘッドラインでは、〈米軍の駐留〉は、〈安倍首相〉が〈やじられたこと〉の理由としての位置づけであり、重要な結合であるはずであるが、それよりも重要度が低かった〈安保法案制定への動きに対する批判〉が前景化されている。「重要度が低かった」という意味は、第2ヘッドラインでは、状況・コンテキストとして位置づけられていた（つまり後景）という意味である。それが、第1段では、後景から前景にせり出てきたのである。構築された世界のなかで、景色が大きく変化したことになる。

第2段

Shouts of “Go home!” and “Warmonger!” could be heard as Abe, a nationalist whose attempts to reinterpret Japan's pacifist constitution have sent his approval ratings to record lows, arrived at a ceremony on Tuesday to mark the end of the battle of Okinawa in which more than 200,000 civilians and soldiers died.

第2段は、第1段をより具体的に述べたものである。いままでの“heckled”という抽象的な表現が、“Go home!”、“Warmonger!”という〈具体的な批判的「声」〉に変換され、引用され、これが〈安倍首相〉に結合されている。さらに、その〈安倍首相〉は、〈国家主義者〉として定義され、結合され

ている。〈安倍首相〉は、これらの結合によって、〈歓迎されない〉や〈戦争〉というアイデンティティとして生成・構築されている。また、いままでの〈安保法案制定への動き〉が、この第2段では、「日本の平和憲法を再解釈する試み」という憲法的次元の表現に変えられ、結合されている。この結合によって、〈安倍首相〉のアイデンティティには、さらに〈反平和的〉な色付けがなされたことになる。そして、〈日本の平和憲法を再解釈する試み〉と〈安倍内閣の支持率の記録的低下〉が結合され、それぞれに〈原因〉と〈結果〉というアイデンティティが生成・構築されることになる。さらに、この〈低下〉によって、〈安倍首相〉には、〈人気のない政治家〉というアイデンティティが生成・構築されることになるであろう。

つまり、この第2段では、いままで構築された世界が、「等価化」と「結合」によって整理されている。まず、「〈米軍の継続的な駐留〉 = 〈安保法案制定への動き〉 = 〈平和憲法再解釈の試み〉」という等価化と、「“heckled” = “Go home!”・“Warmonger!” = 〈安倍内閣の支持率の記録的低下〉」という等価化が行われ、この二つが基本的な〈原因・結果〉として結合されている。

第3段

On a day when 5,000 people, including the US ambassador to Japan, Caroline Kennedy, gathered in the town of Itoman on Okinawa's southern tip to remember those who died in the 82-day battle, a poll revealed strong public opposition to Abe's plans to strengthen the role of the country's military.

ヘッドライン、第1段、第2段の“Okinawa battle anniversary event”、“the anniversary of the end of the bloodiest battle of the Pacific”、“the end of the battle of Okinawa”という表現から、安倍首相が参列したのは“沖縄戦終結記念日”といったようなイメージを読者に与えたであろう。しかし、第3段の“to remember those who died”によって、読者ははじめて“event”が、追悼式であることを知らされることになる。興味深いのは、表象上では、この“追悼式”に参加したのが駐日アメリカ大使のケネディであるいっぽう、安倍首相は“沖縄戦終結記念日”に参列したように構築されている。つまり、〈安倍首相〉に〈沖縄戦終結記念日〉が結合され、〈ケネディ大使〉に〈戦没者追悼式〉が結合され、ケネディ大使のほうが、正式名称に近い式典に参列したように構築されている。

第1段、第2段では、沖縄の人びとの反安倍感情が示されたが、第3段では、安倍首相の軍の強化計画に対する否定的な世論調査の結果が示されている。つまり、第1段、第2段までの「“heckled” = “Go home!”・“Warmonger!” = 〈安倍内閣の支持率の記録的低下〉」に、さらに〈軍強化計画への否定的な世論調査結果〉が結合され、等価化されている。

第4段

Criticism of Abe in Okinawa is running high over his support for the construction of a new US marine corps airbase on a pristine stretch of Okinawa's coastline to replace an existing base located in the middle of a densely populated city.

この第4段ではじめて、沖縄には、基地の移設に関する安倍批判が存在していることが示された。ここで、ヘッドライン以降示されている「〈米軍の継続的な駐留〉 = 〈安保法案制定への動き〉 = 〈日本の平和憲法を再解釈する試み〉」に、〈基地移設〉が結合され、等価化されることになる。

沖縄が抱えている問題にあまり詳しくないイギリス人読者は、この一文を不思議な気持ちで読む可能性がある。つまり、人口稠密なところにある基地から、“pristine”な海辺への移設は、人命の点からは良いであろう、しかし自然環境の点からは良くないであろうという、判断に迷う可能性がありそうだ。

第5段

[要約] 第5段では、翁長沖縄県知事も上記の基地移設計画に反対していることが示されている。この段落では「安倍」の名前は登場していないが、第4段との関係から翁長知事と安倍首相が対立関係にあることが、読者には理解されるであろう。つまり、この段落では〈翁長知事〉に、暗黙のうちに〈安倍首相〉が二項対立的に結合されたことになる。なお、この計画は、たんなる基地移設だけではなく、アメリカ軍の太平洋における軍の再配置と関わっていることも示されている。

第6段

Abe, who appeared shaken by the rare display of public anger, acknowledged Okinawa's role in maintaining Japan's security since the end of the second world war.

安倍首相はやじに動揺したようだが、日本の安全保障を維持する上での沖縄の役割を認めた。つまり、〈安倍首相〉に、〈やじ（“public anger”）に対する動揺〉と〈沖縄の安全保障上の役割認識〉が結合されている。この〈やじに対する動揺〉の結合によって、〈安倍首相〉に〈弱さ〉のようなものがアイデンティファイされていると考えることもできる。

第7段

[要約] 沖縄の日本における地理的説明および安全保障上の過重負担について、ここではじめて言及されている。

第8段

“People in Okinawa have long been asked to carry a big burden for our security,” Abe said. “We will continue to do our best to reduce it.”

第8段では、〈安倍首相〉に、〈沖縄の過重負担認識〉と〈負担削減努力〉が結合されている。イギリス人読者の多くは、安倍首相が、沖縄の軍事面での過重負担を認識し、その削減に努めていると理解するであろう。そのように理解した場合、第4段で言及された基地の移設を、基地負担の削減の一環として理解するであろう。そうすると、第4、5段における、基地移設に対する沖縄の人びとと翁長知事の反対姿勢を、基地負担の削減に反対していると理解してしまう可能性があるかもしれない。そうすると過重負担は避けなければならないという一般的な常識に反し、読者は混乱するかもしれない。もちろん、政治家の演説内容をそのまま信じない人も多くいるであろうし、そのような人は、この演説を反対の意味として解釈するかもしれない。そのような人にとっては、この段落では、〈安倍首相〉が、〈沖縄の過重負担を認識していない〉と〈負担削減努力はしていない〉が結合されていると理解されるであろう。なお、同様のことが、次の段落でも生じている。

第9段

He added: “We must take pride in the path of peace we have single-mindedly walked in the last 70 years and make ceaseless efforts to establish world peace.”

この第9段では、安倍首相の“make ceaseless efforts to establish world peace”が引用されているが、この発言は、“Warmonger!”というやじと〈日本の平和憲法を再解釈する試み〉とに矛盾していることに、イギリス人読者のなかには気づく人もいるであろう。つまり、第2段の[“Warmonger!” = 〈日本の平和憲法を再解釈する試み〉]がこの第9段の〈安倍首相は世界平和に努力している〉と結合されれば、矛盾した意味世界が構築されていることになる。記者は、読者がこの矛盾に気づくことを想定しているのかもしれない。記者は、紙面上の世界の構築にあたって、故意に“矛盾”を滑り込ませているのかもしれない。もしそうなら、当然ながら契機についての理解は、たんにその表象上にとどまるのではなく、表象間の関係性についての読者の「読み」に大きく依存していることになる。

第1ヘッドラインから第7段までに、〈安倍首相〉に否定的な契機を結合させ（後述の表1を参照）、彼のアイデンティティを固定化させた後の第8、9段で、それと“矛盾”する直接引用の演説を結合させていることになる。もしこのような想定が正しいならば、〈安倍首相〉に、〈嘘つきだ〉が結合され、否定的なアイデンティティがさらに生成・構築されることになる。

第10段

Abe was speaking near the spot where Japanese troops who had been ordered never to surrender forced terrified local people to throw themselves off cliffs rather than risk being captured by the Americans who, they were told, would rape and kill them.

この第10段から、沖縄戦の具体的記述が始まる。この段落のなかで安倍首相の演説した場所と〈日本軍の残虐性〉、とくに市民に対する残虐性を示す行為がおこなわれた場所が結合されている。演説の場所に関しては、演説が行われた〈平和祈念公園〉との結合という選択肢もあったはずである。第2ヘッドラインと第1段において、〈安倍首相〉への〈戦争〉の結合を指摘したが、ここでは、〈安倍首相〉と〈日本軍の残虐性〉が、“where”という結節点である関係副詞が示している空間的次元において結合されている。

第11段

[要約] 第11段は、第10段の日本軍の市民に対する残虐性を示す行為を引き継ぎ、つまり結合され、生存者（複数）の証言を間接話法で紹介している。二つの手榴弾が渡され、一つは敵に、もう一つは自殺用であるという証言である。

第12段

[要約] 遺族会の代表者の話が、直接・間接話法を交えて紹介されている。沖縄にはいまだに遺骨や不発弾等が散乱し、沖縄戦の爪跡が残っている。

第 13 段

[要約] 第 13 段では、沖縄戦における具体的な戦死者数（民間人、日米の軍人）が示され、本土決戦がもし敢行されたら、多くの犠牲者がでたであろうと多くの人が信じていたことが述べられている。

第 10 段から第 13 段までのあいだで、沖縄戦の記述がなされている。その記述は主に、〈日本軍の残虐性〉、〈沖縄戦の爪跡〉、〈沖縄戦の戦死者数〉によって構築されている。しかし、日本軍とアメリカ軍がいかに激しく戦ったかについては記述がほとんどなされていない、つまり、結合されていない。

第 14 段

Japan surrendered almost two months later, days after the US dropped atomic bombs on the cities of Hiroshima and Nagasaki.

第 14 段では、〈沖縄戦終結〉、〈原爆投下〉、〈日本の降伏〉が結合されることによって、沖縄戦の位置づけが、時間的次元において構築されている。

第 15 段

[要約] 第 15 段では、翁長知事が、沖縄返還後以来の沖縄が担ってきた不公平な軍事負担に言及したとき、より暖かい（warmer）歓迎のことばを受けたことが記述されている。ここでは“warmer”という比較級が用いられ、ヘッドラインや第 1、2 段で示された安倍首相へのやじと比較されているようである。もしそうなら、記者は、ここで〈歓迎されていない安倍首相〉と〈歓迎されている翁長知事〉を二項対照的に結合していることになる。もしこのような解釈が正しいならば、比較級には、社会的行為者を名詞として登場させることなしに、暗黙のうちに登場させる機能があることになる。この対照化によって〈歓迎されていない安倍首相〉というアイデンティティが再度構築されていることになる。

第 16 段

He urged Abe to reconsider a 20-year-old agreement between Tokyo and Washington to build a new offshore runway on the island, saying his election as governor last year demonstrated the strength of public feeling against the move.

第 15 段に引き続いて、〈翁長知事〉に〈安倍首相〉が二項対照化（対立化）・結合されている。この二人の結合によって、それぞれのアイデンティティが構築される。〈翁長知事〉は〈安倍首相〉に〈要請する（urge）〉という立場を得て、〈安倍首相〉は、〈要請を受ける〉立場として構築されている。記者が採用した“urge”だが、インターネット版の *Oxford Dictionaries* の *British & World English* によれば、“Try earnestly or persistently to persuade (someone) to do something” (<http://www.oxforddictionaries.com/definition/english/urge>) と定義されている。また、インターネット版の *Oxford Dictionaries* の *Oxford Advanced Learner's Dictionary* によれば、“to advise or try hard to persuade somebody to do something” (<http://www.oxforddictionaries.com/definition/learner/urge>) と定義されている。前者の定義では“earnestly（真面目に、真剣に）”と“persistently（粘り強く）”とい

う副詞が用いられている。いっぽう後者でも“hard（激しく、熱心に、一生懸命に）”が用いられ、これらの定義通りに解釈すれば、〈翁長知事〉は、〈安倍首相〉と較べて〈真面目、真剣、粘り強い、一生懸命〉と好意的にアイデンティファイされていると考えられる。

さらに、〈翁長知事〉は〈民意を代表している〉が、いっぽうの〈安倍首相〉は第2段で支持率の低下が示され、〈民意を代表していない〉政治家としてアイデンティファイされている。また、この段落では、両者の対照化（対立化）の軸およびその理由として〈滑走路建設再考要請〉、〈民意は滑走路建設反対〉が結合され、構築されている。

第17段

“We strongly demand that the government cancel construction … and review its policies of reducing Okinawa’s base burden once again,” he said.

第16段で言及した滑走路建設の取り消しの要請と、沖縄の基地負担の軽減策の再検討について、翁長知事の演説が直接引用されている。第16段では〈翁長知事〉と〈安倍首相〉が二項対照化（対立化）されていたが、この段落では〈われわれ＝沖縄県〉と〈政府〉が二項対照化（対立化）され、結合され、さらに〈滑走路建設中止要請〉、〈基地負担軽減策の見直し要請〉が結合されている。

この段落では、“strongly demand”という英訳がなされている。この“demand”は、*Oxford Dictionaries* の *British & World English* によれば、“Ask authoritatively or brusquely”（<http://www.oxforddictionaries.com/definition/learner/demand>）と定義され、*Oxford Dictionaries* の *Oxford Advanced Learner’s Dictionary* によれば、“to ask for something very firmly”（<http://www.oxforddictionaries.com/definition/learner/demand>）と定義されている。前者の定義では、“authoritatively（命令的に、権威をもって）”、“brusquely（ぶっきらぼうに）”が副詞として用いられ、後者の定義では、“firmly（きっぱりと、しっかりと、断固として、毅然と）”が用いられている。これらの副詞の使用を定義通りに適用すれば、〈翁長知事〉は、〈意思の強い、権威ある政治家〉としてアイデンティファイされているようである。片方が、上記のように差異化されれば、もう片方はその逆の存在としてアイデンティファイされる可能性がある。第6段では、安倍首相は“appeared shaken”と描写されているが、この描写と合わせて考えれば、記者は〈翁長知事〉を〈強く〉、〈安倍首相〉を相対的に〈弱く〉アイデンティファイし、構築していると考えることが可能であろう。

第18段

[要約] 第18段では、〈沖縄の軍事基地の新たな戦略的重要性〉が、〈中国の南、東シナ海における島嶼に対する領有権の主張の強まり〉結合されている。

第19段

Some local people fear their island could once again be dragged into war if Abe pushes ahead with plans to reinterpret the US-authored pacifist constitution and allow Japanese troops to engage in collective self-defence — or coming to the aid of an ally under attack.

第19段では、地元民が主語になり、安倍首相が、平和憲法の再解釈をおし進め、集団的自衛権の

行使を認めることになると、沖縄が戦争に巻き込まれるのではないかと恐れていることが記述されている。つまり、〈沖縄県民〉に〈戦争に巻き込まれる恐怖〉が結合されている。さらに条件節では、〈安倍首相〉に第2段で結合された〈平和憲法再解釈の試み〉が再結合され、それが詳細化された〈集団的自衛権の行使容認〉も結合されている。

この第19段では、“fear”ということばによって、〈沖縄県民〉が〈感情的〉になっているとアイデンティファイされている。それは、第1ヘッドラインから第2段までの「やじ」、第6段の“anger”ということばの選択からも十分考えられることであろう。

第20段

[要約] 第20段は、日本の憲法第9条の説明と、歴代内閣の解釈に関する説明がなされている。

第21段

Abe's quest to end that strictly defensive posture recently suffered a setback after three respected scholars said the changes were unconstitutional.

第21段では、第2段などの〈平和憲法再解釈の試み〉に代わって、より詳細化された〈厳しく自衛に徹する方針の取り止め〉が、〈安倍首相〉に結合されている。しかし、その方針に関して〈学者による憲法違反意見〉が結合されている。

第22段

Voters also appear to doubt Abe's reassurances that the change would not increase the likelihood of Japanese troops becoming embroiled in US-led conflicts.

第19段では沖縄県民、第21段では学者が登場し、そしてこの第22段では、有権者が主語になり、安倍首相の考え方に疑問を投げかけている。この第22段では、〈安倍首相〉の〈憲法解釈の変更は、紛争に巻き込まれる危険性を増大することはない〉という考えとそれに対する〈有権者〉の〈疑い〉が結合されている。このように、第19段から22段にかけての結合によって、安倍首相がさまざまな人びとから批判を受けていることが、構築されている。

第23段

A poll by the liberal Asahi Shimbun released on Tuesday showed support for the Abe cabinet at 39%, the lowest since he took office in late 2012. The newspaper attributed the slump to growing public opposition to Abe's security bills. According to the poll, 53% of respondents oppose the new legislation, while 29% support it.

第23段では、新聞による世論調査が紹介され、安倍内閣の支持率が、政権発足以来最低の39%になり、その落ち込みは、安倍政権が推し進めている安保法案への国民の反対に起因しているとされている。つまり、〈新聞による世論調査〉に〈安倍内閣支持率最低〉が結合され、〈新聞〉は、その低下原因を、〈国民の安保法案制定反対〉に求めている。

第 24 段

The end of the Okinawan battle was marked as South Korean women who were forced to work as sex slaves for the Japanese army before and during the war said they would file a \$20m (£12.7m) lawsuit next month at a US court to seek financial compensation from Tokyo.

この第 24 段では興味深い結合が行われている。〈沖縄人の戦いの終結〉と〈韓国人の性奴隷 (sex slaves) 訴訟〉の結合である。日本で、この種の結合を行っている新聞はあまりないと考えられる。

この段落における結合の特徴は、〈沖縄人〉に〈韓国人〉が結合され、さらに〈過去〉に〈将来〉が結合された点である。この段落の出だしは、“The end of the Okinawan battle”である。この記事ではじめて“Okinawan”が用いられ、“South Korean”と対照化されている。両者とも苦難の道を歩んできたが、“Okinawan battle”に関しては“end”であるが、“South Korean”の女性たちは、翌月に訴訟を起こすというのである。

この記事全体の表面的なテーマは、慰霊の日もしくは追悼式への安倍首相の参列であろう。これに〈性奴隷・慰安婦問題〉が結合されたわけである。おそらく多くの日本人は、この結合に“違和感”を覚えるであろう²⁾。本稿の「はじめに」において示した筆者の“違和感”は、じつにこのことである。これを「非必然的」な「節合」と、当初考えたのである。この点についての議論は「3.2 結合と節合について」でおこなう。

第 25 段

[要約] 第 25 段では、訴訟の具体的な訴訟人、日時 (7 月 1 日) 等が示されている。

第 26 段

[要約] 第 26 段では、日本政府は、先祖による悪行に対する公式のそして誠実な謝罪行い、彼女たちの名誉を回復すべきである、という代表者の発言が直接話法で引用されている。

第 27 段

[要約] 主に韓国から最大 20 万人もの女性が、戦時中に強制的に性奴隷にさせられた、と主流の歴史家は言っている。日本は、すべての賠償請求は、1965 年の二国間関係が正常化したときに、解決したと主張している。

3. 考察

3.1. 構築された世界について

下記の表 1 では、“Abe”という表記があるすべての段落で、〈安倍首相〉もしくは〈安倍政権〉と結合されている〈こと〉のなかで、記事のテーマ・トピックと深く関わり、重要だと考えられるものを「安倍首相・政権に結合されたこと」としてリスト化した。なお、第 17 段の“the government”は、

2) 注 1 で示した研究会で口頭発表したのが、〈戦没者追悼〉と〈性奴隷もしくは慰安婦問題〉との結合に、

ほとんどの日本人の参加者が“違和感”をいだいていた。

表1 安倍首相・政権と結合されたこと

ヘッドライン(H)、段落(P)	安倍首相・政権に結合されたこと	安倍否定
H.1	〈やじられたこと〉、〈沖縄戦の記念行事〉	○
H.2	〈やじられたこと〉、〈米軍の継続的な駐留〉、〈安保法案制定への動きに対する批判〉、〈戦争〉	○
P.1	〈やじられたこと〉、〈安保法案制定への動きに対する批判〉、〈戦争〉、〈沖縄戦終結記念日〉	○
P.2	〈具体的な批判的「声」〉、〈国家主義者〉、〈平和憲法再解釈の試み〉、〈安倍内閣の支持率の記録的低下〉、〈沖縄戦終結記念日〉	○
P.3	〈沖縄戦終結記念日〉、〈軍強化計画への否定的な世論調査結果〉	○
P.4	〈基地移設への批判〉	○
P.6	〈やじ ("public anger") に対する動揺〉、〈沖縄の安全保障上の役割認識〉	○
P.8	〈沖縄の過重負担認識〉、〈負担削減努力〉	
P.10	〈日本軍の残虐性〉	○
P.16	〈翁長知事〉、〈滑走路建設再考要請〉、〈民意は滑走路建設反対〉	○
P.17	〈われわれ＝沖縄県〉、〈滑走路建設中止要請〉、〈基地負担軽減策の見直し要請〉	○
P.19	〈沖縄県民〉、〈戦争に巻き込まれる恐怖〉、〈平和憲法再解釈の試み〉、〈集団的自衛権の行使容認〉	○
P.21	〈厳しく自衛に徹する方針の取り止め〉、〈学者による憲法違反意見〉	○
P.22	〈憲法解釈の変更は、紛争に巻き込まれる危険性を増大することはない〉、〈有権者〉、〈疑問〉	○
P.23	〈新聞による世論調査〉、〈支持率最低〉、〈新聞〉、〈国民の安保法案制定反対〉	○

* 「安倍否定」：〈安倍首相〉に対して否定・批判的なことが結合されている場合は「○」を付した。

安倍内閣を指すと考えられるため、リスト化した。なお、第24段から27段までの“Tokyo”や“The Japanese government”は、必ずしも安倍政権である必要はないと考えられるのでリスト化しなかった。

この表1から次のことが言える。ヘッドラインと全段落は、合計29になり、そのうち14において安倍首相・政権に対して否定・批判的である。つまり、この記事の約半分以上が安倍首相・政権に否定的な論調で占められていることがわかる。

安倍首相・政権を否定・批判している社会的行為者は、沖縄の人びと（やじが沖縄の人びとによってなされたか否かについての確証は同記事では言及されていないが、状況的にはそのように解釈される）、国民（世論調査・有権者）、翁長知事、憲法学者たちである。いっぽう、“味方”は一人も登場していない。

安倍首相・政権を否定・批判する理由・原因は、大きく二つに分けられる。同記事でまず言及されているのが、平和憲法の解釈の変更、安保法案制定の動きである。もう一つは、基地移設問題、基地の過重負担である。前者の理由・原因は、まず第2ヘッドラインから第3段までで用いられ、後者は、第2ヘッドラインと第4段から8段までで用いられている。van Dijk (1988: 43) が *News as Discourse* のなかで “. . . the ordering of the text is defined rather by relevance of topics (first, main topics

come first) than by some logical order of topics.”と言っていることから考えるに、平和憲法の解釈の変更、安保法案制定の動きへの批判というトピックの方が、もう一つの基地移設問題、基地の過重負担よりも重視されていると考えられる。

〈安倍首相・政権〉は、さまざまな結合を通じて、否定・批判的にアイデンティファイされている。実際の否定・批判的な声(“Go home!”、“Warmonger!”)が引用され、その抽象的なことばとして“heckled”が第1、2ヘッドラインとリードで、連続的に繰り返し用いられている。さらに、第6段では“public anger”、第2ヘッドライン、リード、第4段で、合計3回“criticism”が用いられている。また、第2ヘッドラインとリードで、〈安倍首相〉に〈戦争〉が結合されている。このように、記事の最初の部分で、たたみかけるように、マイナス・イメージの契機が結合されている。さらに、同記事は、安倍政権に否定・批判的な世論調査の結果を、第2、3、23段で引用している。

安倍首相とは直接的な関係がない場面で負のイメージが安倍首相に結合されている。たとえば、第10段では、沖縄戦における〈日本軍の残虐性〉が、安倍首相に結合されている。

以上の考察から、同記事のテーマは、安倍首相・政権批判であり、トピックは第一に平和憲法の解釈の変更、安保法案制定の動きであり、第二に基地移設問題、基地の過重負担の問題であって、沖縄戦についての本格的な言及は、第10段から第14段までで、さきに示したテーマやトピックと比べて、格段に少ない。

この記事で構築された世界を“舞台”として比喩的に描けば次のようになるであろう。この舞台の演目は、「戦後70年沖縄全戦没者追悼式への安倍首相の参列」のようだが、それは「沖縄戦の終結記念行事」として背景画として描かれている。その舞台の前面に安倍首相が配置され、その周辺には戦争を想起させるさまざまな小道具が置かれ、悪いイメージの人物として描かれているようだ。たとえば、彼の台詞は、観客にはそらぞらしく聞こえるような工夫がほどこされているようだ。主役の安倍首相に対立する登場人物として翁長知事が配置され、安倍首相よりも真面目で、一生懸命な人物として描かれている。安倍首相は、さまざまな人物から批判され、味方になる人物は登場しない。観客にとって、とても印象的な出来事は、名前が与えられていない脇役からの安倍首相への厳しいやじがとぶシーンであろう。日本人の観客は、この舞台のテーマを、「戦後70年沖縄全戦没者追悼式への安倍首相の参列」として期待していたと考えられるが、主たるテーマを、第一に平和憲法の解釈の変更、安保法案制定の動きへの批判であり、第二に基地移設問題、基地の過重負担の問題であるように感じたであろう。舞台は、性奴隷もしくは慰安婦の問題で幕がおろされたが、なぜこのシーンが挿入されたのかについて理解しがたい思いで家路についた日本人の観客は多かったかもしれない。

3.2 結合と節合について

ここでは「1. 分析対象およびアプローチ」で言及した、「節合」概念の「非必然的で、非決定で、非絶対的かつ非本質的なもの」に関する議論をおこなう。〈戦後70年沖縄全戦没者追悼式への安倍首相の参列〉に〈安保法案制定への動き〉が結合されることを「必然的」と考える人もそうでないと思う人もいるであろう。しかし、〈性奴隷もしくは慰安婦問題〉が結合されることに関して、「必然的」と考える日本人読者はあまり多くはないと考えられる。イギリス人読者のなかには、結合されているという事実に引きずられて、「必然性」を感じてしまう人もいるであろう。

人が日常的にもっている考え方、心情、信仰、世界観等によって、ある二つの事象を「必然的」と捉える人もいるし、同じ事象を「非必然的」とであるとする人もいるであろう。「A は悪事をはたらいた」その後「A に災難がふりかかった」という“二つの別個の事象”を、ある人は「必然的」と考えるであろうし、別の人は「非必然的」とであるとするであろう。いや、そもそも“二つの別個の事象”とは考えない人もいるであろう。

今回問題になった、「性奴隷もしくは慰安婦」も「沖縄戦の犠牲者」も同じ戦争の犠牲者であるという考え方を持っている人もいるであろう。そういった人びとのなかには、〈戦没者追悼〉に〈性奴隷もしくは慰安婦問題〉が結合されることを「必然的」とであるとする人はいるであろう。また、日本との関係から沖縄と韓国をみればそこになんらかの“共通点”を見出す人もいるであろう。その人たちのなかには、当該の結合に「必然性」を感じる人もいるであろう。「必然的」と「非必然的」の区別は曖昧であり、立場や世界観によっては180度変わることがある。「節合」概念の再考が必要であると考えられる。

4. おわりに

〈安倍首相〉に結合された契機を明示化することによって、どのような世界が構築されたかがある程度示すことができたと考えている。今回の分析を通じて、結合されている契機に関して「非必然的」と「必然的」の区別をもうけないことによって、先入観をある程度排除することができ、世界の構築に関する洞察が深まると思われる。ただ、すでに指摘したように、契機の同定に関して「主観的である」という批判は当然あるであろう。このような要素・契機に関する先行研究は多くあるので、これらを整理して、「結合」にあった同定方法を考えていく必要がある。これが、今後の課題である。

参考文献

- 石上文正 1995 「時事英語研究の基礎理論に関する一考察」『時事英語学研究』、第34号、社団法人日本時事英語学会
- 石上文正 2013 「リップマンの「疑似環境論」を言語化の視点から再考する——新たな疑似環境論にむけて——」、川原清志、金井啓子、仲西恭子、南津佳広編著『メディア英語研究への招待』金星堂
- グッドマン、N. 1987 (菅野盾樹、中村雅之共訳)『世界制作の方法』みすず書房
- ホール、S. 1998 (ローレンス・グロスバーク編、甲斐聡訳)「ポスト・モダニズムと節合について——ステュアート・ホールとのインタビュー」『現代思想臨時増刊号』(第26巻第4号)
- ラクラウ、E. とムフ、C. 2012 (西永亮、千葉真共訳)『民主主義の革命：ヘゲモニーとポスト・マルクス主義』筑摩書房。[原著: Laclau, E. and Mouffe, C. (2001) *Hegemony and Socialist Strategy: towards a Radical Democratic Politics*, 2nd edition, London: Verso.]
- Slack, J. D. 1996 “The theory and method of articulation in cultural studies” In Morley D. and Chen, K. (eds) , *Stuart Hall: Critical dialogues in cultural studies*, London and New York: Routledge, pp112-27
- van Dijk, T.A. 1988 *News as Discourse*, Hillsdale, New Jersey: Lawrence Erlbaum Associate, Inc.

分析対象記事

Justin McCurry, J. “Japan’s PM Shinzo Abe heckled at Okinawa battle anniversary event” (Tuesday 23 June 2015

11.57 BST, Last modified on Friday 26 June 2015 10.33 BST)

<http://www.theguardian.com/world/2015/jun/23/japan-pm-shinzo-abe-heckled-okinawa-battle-anniversary>

石上文正 人間環境大学特任教授 (時事英語)